

知性のために教育はいかにあるべきか III

- 交流分析的観点による自我の育成と知の復興 -

How should be the Fundamental Education to cultivate Intelligence? III

- On Ego-Nurturing and Intellectual Restoration
from a View Point of Transaction Analysis -

丸山 博道
Hiromichi Maruyama

目次

- | | |
|------------------------------------|--------------------------------|
| I . はじめに | IV . 行過ぎた商業主義からの脱皮 |
| II . 知的不誠実さを生み出す土壌 | 1 . 教育の真のスタンスと生産プロセスの取り戻し |
| 1 . 一面的教育の不道德性 | 2 . 生産プロセスとしての真の子育て |
| 2 . 危機的状況にある事態分析力と大学の商業主義的現状 | V . 性急な社会化がもたらす知の損壊 |
| 3 . 分析力は研究者のものという後進性 | 1 . 特異な学生の事例 |
| 4 . 商業化と知の崩壊 | 2 . 性急な社会化の圧力と知の損壊 |
| 5 . 教育の課題としての分析力の涵養 | 3 . 理想的な自我育成に関する交流分析的命題と現況との落差 |
| III . データベース (DB) 分析訓練を通して見えてくる問題点 | VI . 知的不誠実さの矯正 |
| 1 . DB 分析訓練の効果 | 1 . DB 分析訓練 |
| 2 . 実験的な DB 分析訓練から見えてくる問題点 | 2 . 卒論指導 |
| | VII . おわりに |

I . はじめに

この小論は、III 章で紹介するデータベース (DB) 分析訓練を通して見えてくる次の3つの問題のうち、特に と について考察したものである。

効果の上がないこのような知的地盤は、如何にして生まれてきたか。

知的に誠実な子どもは如何にしたら育てられるか。

知的に不誠実な子どもは如何にしたら再教育できるか。

II 章では、「知的不誠実さ」の観点から、問 の歴史的・文化的背景が考察され、また、IV 章と V 章では、問 と問 の心理学的問題が考察されるが、IV 章では、「生産プロセスの取り戻しが必要である」という観点から、また、V 章では、交流分析 (Transaction Analysis) の観

点から、考察が行なわれる。VI章では、問に対する予備的考察が行なわれるが、今のところ、その訓練法の具体化について議論を喚起するに留まっている。今後の研究課題である。

筆者は、これまで同一の標題で2篇の小論を書いてきた。今回はその3篇目である。いずれも「知のあるべき姿」から「教育のあり方」を提案することを目的としてきたが、多様な議論に耐えられる「教育のあり方」を模索するために、それぞれ異なる視点を加味して議論の深化を図ってきた。第1篇¹⁾は、「知の戦略的スキーマ」という認知心理学的視点からの議論であったが、第2篇²⁾では、RDI (Relationship Development Intervention: 対人関係発達指導法) の有効性を「脳の報酬系に響く訓練であるがゆえの効果」という視点を加味して議論した。今回は、TA (Transaction Analysis 交流分析)³⁾の視点を加味して考察を試みている。

TAとは、人の有する自我を、<親/大人>・<成人>・<子ども>の3成分に分解して、それぞれの姿や、相互の関係、さらには交流におけるこれらの成分の作用関係を理解し、交流の特性を把握するとともに、本来の姿への回復を目指す心理療法である。今回、TAという視点を採用した理由としては、V章で提示する特異な学生の理解に有効であること。<成人>の自我とは、世界をデータに基づいて公正に把握しようとする、普遍道德の実践者であって、それはまさに筆者がDB教育を通して学生たちに実現して欲しい姿であることが挙げられる。

この小論を理解していただくためには、<成人>の自我成分は<子ども>の自我成分の発達なしには、自然には育たないということを理解していただかねばならない。データに基づいて事態を分析するには、十分な分析スキルと、知的な誠実さが必要であるが、特にこの知的な誠実さは、<子ども>が、事態を現象化する喜びを十分に知り、無邪気にその喜びを追求することによって、自然に実現されていく。それゆえ、公正な<成人>を生成するには、その前に、純真無垢な<子ども>を充分発達させておかなければならず、そこに親の自我の<親/大人>成分の本来の働きがある。その意味で、小論では<親/大人>成分の歪みが批判される。しかし、不幸にして十分<子ども>の自我成分を発達させられなかった者は、<成人>の自我の立場から普遍道德の実践を決意することが必要になる。現在の大学教育は、いかにこの実践を促し支援するかが問われている。その問がである。

II. 知的不誠実さを生み出す土壌

1. 一面的教育の不道德性

存在というものは、すべからく、生態論的に、全方位的に、その存在のあり方、すなわち存在性が探求されるべきものであって、それを誠実に遂行することが普遍的な道德^{4),5),6),7)}である。無論この根底には、事実は当為を指し示すVectorであるというW. Köhlerの命題がある。しかるに、世の趨勢は、浅はかにも、経済効果を優先して憚らず、自己実現のためにその個の能力をいかに開発すべきか、という教育本来の問題意識を捻じ曲げながら、社会的人材の養成ということばかりを、教育の柱として押し立ててきた。

この結果、社会的人材とは、ものごとを経済効果あらしめるように把握せんとする不道德者

の謂となった。徳育などというもので、この根本的な歪みを正せるものではない。なぜなら、まさに教育こそが、この不道德者乱造に手を貸し続けている張本人だからである。

全方位的把握を実現せんとするには、人並み優れた観察力と分析力が要求され、そのためには、分析のスキルとともに、知への誠実さが要求されねばならない。しかし、高々収益に帰するだけの経済活動の中に、そのような誠実さが期待されたことは、未だかつてなく、「計算の原理などは、経済活動では問われないから、計算ができればよいのだ」という偏った原則に基づいて、この国の教育は組み立てられているのである。

こうした一面的教育によって生み出されてきた知への不誠実さが、いよいよ経済活動の効率性や社会秩序を脅かすに及んできて、徳育の必要性が議論されるようにはなったが、その議論からは、知への誠実さを根本的に実現しようなどという覚悟は伝わってこない。

2. 危機的状況にある事態分析力と大学の商業主義的現状

筆者にこのようなことを言わしめるのは、学生たちの事態分析に対する不誠実さが、かつてない低調なレベルに落ち込んでいることに対する危機感である。むしろそれは、直ぐにも経済活動に現れるであろうが、それ以上に、彼ら自身が真実に盲目になり、あるべき生存環境を見失ってしまう危険性があるからである。彼らは、この社会の崩壊を乗り越えて、自己を実現せねばならないのではなかろうか。

この社会も、おそらく危機感を部分的に共有していて、それゆえ分析力の涵養を大学教育に要請¹⁰⁾している。そして多くの大学では、その要請に対して統計学の講義を提供するという形で応じている。しかし、その応え方は、果たして正しいのであろうか。

統計学が提供する数学モデルは、事態を全方位的に把握するだけの力を持っていない。初学者たちが、己の研究を科学的に見せかけるために、統計学に期待するところが大きいのは、今に始まったことではないが、実際に事態を全方位的に把握するということは、まさに真実に迫ろうとすることであって、そのようなみせかけとはまったく次元の異なることである。

また、文系・社会系の大学で行ないうる統計学関連の授業は、精々マニュアル的統計実務に留まらざるを得ない。「マニュアルだから商品化できるのであって、全方位的分析訓練など、客が好まぬものが、どうして売れるのか」。こうした風潮の大学の現状が、学生の知的崩壊を放置しているのである。

3. 分析力は研究者のものという後進性

分析は通常、「データに基づく事態の基本的事実集合の把握」、「推論」、「データによる推論の裏付」、そして「事態の拡大された事実集合の把握」といったスパイラルを上昇していくもので、その作業は、幾何学の構成と変わるところがない。では、問おう。この国では、幾何学の構成を何処で教えているのかと。読者は、どこで学んだかと。

データによる推論の裏づけには、データから諸量の関係性を導くという作業が不可欠であり、そのためには、如何なる条件の下で如何なる量を集計するか、たとえば、如何なる行見出し・

列見出しのもとで、如何なる量を集計するかといった問題を自在に解いて行かねばならない。そこで、再び問う。読者は、こうした訓練をどこで受けたかと。たとえば、ある統計白書から、可能な限りの情報を抽出するような作業訓練を受けたことがあるかと。

おそらく、多くの読者は、そのような教育訓練を受けた記憶はないであろう。各自の研究を推し進めていく中で、自然に身に付けて行ったというのが本当のところだと思われる。そのような計算プロセスでも、データのスケールを小規模に抑えれば、初等中等教育のスケジュールに乗せることは十分可能であるのに、これまでの教育的文化水準では、考えられたことはなかった。

もっとも、その前に、ある事態を観察し、データを収集するという行為そのものすら、十分行なわれてはこなかった。ましてや、その分析などという問題は、専門家のものであり、教育は一般経済活動用の仕様であるべきと考えられてきた。「皆が研究者になるわけではあるまいし、…」というわけである。

しかし、そうした考えは、研究者になるべき人材の知的レベルを押し下げ、歴史的にもあらゆる分野で、分析力不足による戦略的過ちが繰り返されてきた。さらに現在は労働階級も大きな格差の中にあり、研究者でなくても、高い分析力が要求されることがある。さらには、時代の大きな変化の中で自己実現を果たして行くためには、事態を分析する力は誰にとっても不可欠なものとなってきている。

しかし、筆者は、だから「分析力」アップのための教育が必要だなどとは主張したくはない。「事態を全方位的に把握し、事実を克明に現象化すること」が「当為を導くための」普遍道徳であるからこそ、それを主張するのでなければならない。

4. 商業化と知の崩壊

教育的文化レベルが低調であっても、原材料と生産のプロセスが、まだ身近に存在していた時代には、事態を現象化しようとする思考は、生活の中に自然に息づいており、必ずしも教育を受けていない人々ですら、高度な分析力を有していたのである。それはたとえば、多くの職人技が証明してきたところであった。

ところが、社会の商業化が進行し、原材料と生産のプロセスから、遠く切り離された若者たちは、どのような事態も専門家をして現象化せしめることができ、必要ならば、その知識を「商品」として購入できるものと勘違いしている。したがって、彼らにとっては、知の追求ではなく、金銭の追求に誠実であれということが、生きるに重き格率となっている。

学生の中には、「自分は文系人間だから、数式は苦手だ」などと言って憚らない者が少なくない。彼らは、確かに、質的・量的関係をじっくり現象化する知的誠実さに障害を受けている。しかし、それは素質とは限らない。彼らの生活環境が、好奇心旺盛な子どもの自我を萎縮させ、固定化したということかもしれない。

したがって、できるだけ若い時期に、知的不誠実さを自覚し、再訓練を受ければ、回復する

余地もあるかもしれない。しかし、そうした不誠実さの上に、金銭依存・専門家依存の大人の自我を構築してしまったら、回復は非常に困難になるであろうし、一旦獲得した知的スキルも錆付いていくことであろう。

5. 教育の課題としての分析力の涵養

商業化の進行に伴うこのような知的不誠実さは、企業活動の停滞に留まらず、行政、子育て、教育、医療、介護等々、社会のあらゆる側面を、機能停止に陥らせる。生産プロセスから切り離され、事態分析の力を失った社会は、早速、分析力の涵養を教育に求めてくる。もっとも、それは何であれであって、みずから担うという精神性の欠如は、まさに商業主義そのものである。

教育は、その要請を限りなく引き受けている。まさに隷従と言っても良いかもしれない。しかし、なぜか結果が出てこない。引き受け方が実に不誠実である。まともに引き受けたら身が持たない。まともに拒否したら首が飛ぶということらしい。しかし、生徒・学生の実態を本当に見ていれば、その危機的状況を放置できなくなるはずである。彼らの自己実現のために何ができるかと。教育界は、とても正常に機能しているとは言えない。

社会が、危機感を持って、大学教育に要請している分析力の涵養に対しては、データベースや表計算を駆使した、生きた事態を縦横に分析する訓練科目の方が、統計学より、数段妥当な応え方である¹¹⁾。なぜなら、そうした科目は、分析スキルとともに、知的誠実さを強く要求するからであり、知的不誠実さを自覚させるのに有効であるからである。

しかし、そうした訓練は、不人気であることが運命付けられている。多くの学生は、己の不誠実さと向き合わねばならない。分析の結果、事態のさまざまな側面が見えてきて、わくわくするようになるまで、成果は生まれない。15回の訓練で、そこまで到達する学生が少なければ、学生による授業評価は、惨憺たる結果に終わるはずである。賢い人間は手をつける道理がない。

III. データベース(DB)分析訓練を通して見えてくる問題点

1. DB分析訓練の効果

ところで、そのような分析訓練の教育を敢えて行なえば、どの程度の学生に効果が上がるのかと問う読者もおられよう。筆者の限られた経験から考えて、短期の科目で本当の分析力を養成することはできない。分析力を支えるものは、分析スキルだけでなく、知的誠実さであるからである。しかし、その事実を印象付けることは、<成人>の自我成分を省みる良い機会にはなる。

筆者は、ある大学の2～4年生を対象に、半期15回のデータベース演習で、データベースの基本実習{正規化・コード化・一意化と関係スキーマの構成、テーブルの定義、クエリー(関係演算と集計)、フォーム}、それに、サンプルデータベースを用いた分析実習を行い、最終段階で、筆者自身のTV視聴記録データベースを分析するという課題を用意した。そし

て、第 15 回目の授業で、分析課題の反省会を行ない、分析結果として学生が主張している事柄を、実際にデータに基づいて再点検して見せた。なお、の分析実習は、クエリーで取り出したダイナセットを表計算上で詳細に分析するという内容であったが、配列数式やピボットテーブル / グラフ等の復習も余儀なくされた。

本年度の受講生は 47 名。合格者は 30 名。分析結果を報告したものは 17 名。そのうち、何とか分析らしいレベルに到達した学生は 5 名。そして残り 12 名の分析は、不誠実さの目立つものであった。また、不合格者は、の分析実習の辺りから徐々に落ちこぼれていった。

分析の合格ラインに到達した学生たちは、それに先立つ実習成績も上位レベルにあった。しかし、実習成績が同程度でも、の課題分析の成績が良いとは限らなかった。要するに、スキルのには同程度でも、それを丹念に駆使して、データから推論を裏付ける努力ができていたとは限らなかった。の分析成績の良い学生たちは、スキルと共に、比較的高い知的誠実さを有しているという印象を受けた。

こうした授業の結果、60%以上の学生にデータベースの基本を理解させることはできたが、10%程度の学生にしか、知的誠実さを認めることはできなかった。こうした誠実さというものは、半期の授業ですぐに身に付くという性質のものではないが、分析スキルの習得と、知的誠実さの必要についての自覚は喚起できた。

2. 実験的な DB 分析訓練を通して見えてくる問題点

ところで、こうした誠実さや、不誠実さが、この授業の効果であると考える人はいないと思う。だからこそ、「どれ程の効果があるか」という懐疑的な問が発せられるのである。しかし効果が上がらないと決め付け、何もしなければ、以下の問題点について考える機会は得られない。

効果の上がないこのような知的地盤は、如何にして生まれてきたか。

知的に誠実な子どもは如何にしたら育てられるか。

知的に不誠実な子どもは如何にしたら再教育できるか。

しかし、こうした問題意識は、商業化された大学教育の現場では、ますます希薄化している。それどころか、卒業生の就職先の経験として、その多くは、データベースを必要としないから、履修困難な科目を取って履修させる意味はないのではないかといった議論さえ聞こえてくる。なぜ、あまり優良でない企業の業務水準に、個の知的水準を合わせねばならないのであろうか。

改めて言うまでもなく、データベースはあらゆる情報システムの核である。情報管理には欠かせぬ道具である。たとえば、秘書たるものが様々な資料の保存管理にそれを使えなくて良いのか。営業上の問題点を分析できなくて良いのか。たとえ直接触れぬとしても、そうした環境の中で仕事をしているということが理解されていなくて良いのか、…。しかし、こうした疑問に対しては、現実の姿をそのまま言葉にすれば、次のような答になる。「いや、むしろ使えなくて良いのだ。安直な努力に相応しい安い労働力に仕立て上げられることこそ、彼らとその親

たちの『願い』なのだから、消費者が求めるものを作り、売るのが、商売の原則だろう」と。

しかし、知的障害者の中にさえ、自己実現のために真の教育を待ち望んでいる者たちがいるのをご存知だろうか。社会は彼らに清掃のような軽作業を、しかも期限付きで、提供することしかできていない。どのような者も、己の生理的条件の上に、自己を実現する権利と義務を有している。そのために教育は機能すべきであって、一生不安定で、技術的な蓄積が期待できない環境に隷従することを奨めるべきではない。

IV. 行過ぎた商業主義からの脱皮

1. 教育の真のスタンスと生産プロセスの取り戻し

知的障害のあるなしに関係なく、学ぶべき課題は同じである。ただ、その方法が模索されねばならないだけだ。障害者にも甘えは許されない。真実を知るための訓練には、教師と共に耐えなければ、何の収穫も得られない。

教育とは、本来そうしたスタンスの上に成立しているものである。学生が嫌がるとか、学生の未熟な認識と相容れないといった理由で、要するに、商品として売れる / 売れないといった理由で、手をこまぬいているようなものは、教育の名に値しない¹²⁾。

あらゆるサービスを商品化してやまない世の中の流れが、そのまま即、誠実な思考プロセスであるところの生産プロセスを若者から遠ざけた結果¹³⁾として、彼らの知は急速に崩壊を始めている。しかし、最後の防壁となるべき教育までが、みずから商業主義の中に身を翻してしまったら、この国民は、たちまち、総白痴化してしまう。

筆者の知るある工務店の一徹な老職人が、近隣の大学を評して言った。「あそこの学生の半分は、バカだな」と。たしかに総白痴化は半ば進んできていると言えるかも知れない。もっとも、多少はその内実を知っている筆者からすれば、その事実をその大学の教育のみに帰することはできない。少子化の流れが、大学の商業主義化を推し進め、入試が選抜の意味を失った時、初等中等教育の矛盾や、子どもたちの生活習慣の歪みが、そのまま大学を襲ったということである。しかし、商業主義化した大学に、この白痴化を食い止める力が残っているのだろうか。

ただ、選抜を厳しくして、そうした学生たちを別の世界に追いやったからといって、この国の教育の問題が解決したことにはならない。大事なことは、社会全体が、行過ぎた商業主義から脱却し、生産のプロセスを生活の場に取り戻すことである。大学もまた然りである。大学は真の教育を取り戻し、学生の知の復興を目指さねばならない。

商業主義から脱却することは、すべてを貨幣に依存している都市住民にとっても極めて困難な問題である。かつて豊かさを象徴した都市は、今や「貧困化した知」の巣窟¹⁴⁾に化しつつある。そこはもはや子育ての場所ではない。「親」は子どものために「保育」や「教育」といった商品を買ひ与えるだけの場である。子は犬と同等の「親」の愛玩物に過ぎない。子どもたちの知性開発に、すなわち「子どもの知の生産プロセス」に携わることのない「親」は、すでに親ではなくなっている¹⁵⁾。そのような「親」は、子育てという己の知的活動を放棄している。彼

らは、「保育・教育」商品の瑕疵をあげつらうことしかない。無論、それとて自分たちが本当の親でないことを知り抜いた上での、苦しみの表現であろうが、ただ、言えることは、「親」が苦しんだところで、商品を買って与えるだけでは、子ども親も育たないということだ。

2. 生産プロセスとしての真の子育て

都市住民に取り戻すことができる生産プロセスがあるとすれば、それは「真の子育て」であり、自ら教育に携わることである。親がまさに親であるための営みがそれである。その中では、子どもを絶えず子どもらしい生産のプロセス¹⁶⁾に誘うことが求められる。子どもはそのプロセスの中で懸命に思考し、生産物を収穫する喜びと思考の重要性とを経験して行かねばならない。必要なのは子ども部屋ではなく、親と過ごす「知の共同作業空間」である。

近代国家は、富国強兵のために、義務教育制を布き、子どもたちを学校に奪い取った。立身殖産とは、その理不尽さを隠蔽する美名であった。親はもとより職場に奪い取られ、親子は完全に分断されている。職場に奪い取られた親は、否応なしに、貨幣で必要物を買うしかない。「子育て・教育・介護」などの商品もその一部である。しかし、それでは、親子の知も心も育ちはしない。親たるものは、決意して、職場への隷従から、抜け出すより仕方がない。そのこと¹⁷⁾に一日も早く気づくべきである。

近年、就農・帰農しようとする者たちが増えている。国は、農業の大規模化を支援している。しかし、これらの動きは、まったく思惑を異にした動きである。一方は、行過ぎた商業主義への決別宣言であり、他方は、相も変らぬ商業主義への女々しい追従である。

時代は分裂し、いよいよ末期的症状を呈している。過度な商業主義の中に生まれたあからさまな格差と、歴史を先取りする者と_時代に取り残されていく者との密かな格差とが、混在している。この商業主義の中でかろうじて勝組になったとしても、それはやがて時代に取り残される側に入るかもしれない。ようやく適合するだけの力しか養ってこなかった者が、そうした運命に遭遇して、いかにして次の時代を生きていけるのだろうか。その時、路頭に迷う者は、あの知的障害者より、優れていたと言えるのだろうか。子どものために必要な教育とはどのようなものであるべきなのか。親も社会も真剣に考える時が来ている。

V. 性急な社会化がもたらす知の損壊

1. 特異な学生の事例

非常に特異な経歴を持った一人の男子短大生がいた。父親は、次男であったが、数代にわたって引き継がれてきた会社を継がざるをえなくなった。会社は危機的状況にあり、そのまま一族の危機であった。父親はそれまでの住まいを売却し、近郊の町に移転し、彼も転校を余儀なくされた。父親は会社の建て直しに忙殺され、母親は急変した家計の遣り繰りと、姑との諍いに苦しめられた。夫婦喧嘩も激しくなり、しだいに母親の態度は荒んでいった。騒動が起こって、約一年後、遂に彼は学校に通えなくなった。小学校4年生の2学期の頃であった。家

庭における安全な居場所の喪失と学校での孤独は、大きな心理的負担であった。

学校に行かなければ、働かねばならぬ。それが父親の命令であった。彼は、父親の命ずるまま、親戚のみかん農家や町工場を転々とした。親から見捨てられないために、服従しかありえなかった。一日も登校することなく、形式的に小中学校を卒業して、バイトをしながら定時制工業高校へ通い、皆勤で卒業して、アルマイト加工の工場で働いた。新入工員が直ぐに辞めていくような厳しい労働環境だった。しかし彼は忍耐強く働いて、新入工員の技術指導を担当するまでになった。23 歳になって、同年輩の者たちが大学を卒業する頃、無性に、普通の人生を夢見るようになった。スーツを着た営業マンたちが眩しかった。彼は、それまでの貯金をはたいて、ある短大に入った。それも女子ばかりのコースに。

筆者は、1 年次に表計算演習を担当した。彼には、計算というものが身につけていなかった。なかなかスキルが積み上がって行かない¹⁸⁾ もどかしさを感じた。しかし、彼は忍耐強かった。学ぼうとする意志も尋常ではなかった。多くの男子学生が脱落していく中で、彼は最後まで学習意欲を保ち続けた。2 年次にはゼミを担当した。当初、コース実習における、女子学生の視線や失笑に過敏になっていた。彼は、自分の人生や存在の特異性を余りに意識し過ぎて、どのように他者との関係を持てばよいのか戸惑っていた。

就職課の行なう適性検査の結果も特異なものだった。コミュニケーションとプレゼンテーションの評価のみが高く、論理的思考の評価などは極端に低かった。彼の就職活動の開始はかなり遅かったが、6 社ほど挑戦した後に、内定を貰った。彼の志望動機や自己 PR は、常に華々しいものだった。彼は、世の中に流通している外在的な価値（環境対策・少子化対策・高齢化対策、等々）を、きわめて巧みに織り込んで、実現すべき自己像や企業像を描き出すことが得意だった。しかし、その実現の方法はまったくの白紙だった。しかし、彼には誰にも負けないと自負する「忍耐力・精神力」¹⁹⁾ があった。自分の構想の実現²⁰⁾ も、少しずつ教えてもらえれば（彼の表現のママ）、実現できるはずだと主張した。

彼のこうした華々しいアピールの背後には、日常業務遂行に対する強い不安が隠されていた。彼は、内定後にも関わらず自衛隊を受験するという一見不可解な行動を取った。彼はそれに合格して、彼自身の「忍耐力・精神力」を証明してみせたのであるが²¹⁾、それはあの不安が的中した場合の担保を確保するという意味もあった。自衛隊への入隊は、数ヶ月先まで有効であった。彼にとって、この内定は余り幸せなものではなかった。忍耐力と問題解決能力とは別物であることを、彼は感じ取っていたからである。

彼には、貯金が底を突くというぎりぎりの時間圧の中で、自動車運転免許を取り、就職活動を終え、自分の精神力を彼なりに証明もし、一応成功裏に短大を卒業したのである。しかし、彼の適性スペクトルは、極めてアンバランスのままであった。また、彼の内なる＜子ども＞の成分は、忘れ去られたように機能していなかった。そして、内なる＜成人＞の成分は、彼の父親に移植された＜親＞の自我²²⁾ によって汚染されたままであった²³⁾。しかし、このような偏った自我状態が、彼の歪んだ Gestalt²⁴⁾ を生み出していることを、彼は少しずつ理解し始めていた。

彼の内なる＜成人＞の成分は、彼が世界を丹念に観察して、事実に基づいた判断を鍛えていくことで、少しずつ公正なものになるように変化していかなばならなかった。

「学校に行かなければ、働かねばならない」という命令は、余りにも極端な＜親＞の自我であるが、彼の精神力は、この格率によって鍛えられ、一方、これによって、天真爛漫に真実を見つめようとする好奇心旺盛な＜子ども＞の自我は押し潰されてしまった。もっとも、彼は、小学校3年生の頃までは、ピアノや水泳を習う裕福な家庭の幸福な少年であった。やがて、仕事に自信が持てるようになれば、彼の抑圧された＜子ども＞の自我にも、血が通い出すかもしれない。筆者は、卒業までに、小中学校の算数を子どもの眼差しで総ざらいするように再三指示はしたものの、実際には、容易なことではなかった。

2. 性急な社会化の圧力と知の損壊

この事例は、極めて特異に見えるかもしれないが、実はそうではない。多くの子どもたちが、程度の差こそあれ、親あるいは大人による性急な社会化（自立）の圧力（強迫）を受けながら、苦しげに生きているのである²⁵⁾。性急な社会化の要請は、子どものためではなく、大人のエゴによるものである。

こうした大人のエゴが移植された子どもの自我は、その時間圧のために、量的関係であれ、質的關係であれ、関係性を丹念に確認し、積上げていくということができなくなる。そのために、新しい側面を現象化するということもなく、現象化する喜びというものからも遠ざけられ、知的好奇心を大きく損なってしまう。

基礎学力というのは、基礎的事実を原理として抽出し、そこから演算系を構築できる力のことで、単に基礎知識とは別ものである。上で挙げた特異な男子学生は、漢字や、現代史などの知識は、平均以上のレベルにあったが、たとえば、「3割引の商品を560円で買ったとすれば、元値はいくらか」というような量的関係の解明には、ほとんど当事者感覚を失っていた。

もっとも、このような問題が解けたとしても、こういう場合は、こうすればよいといったマニュアルを習得しているだけでは、真の学力とは言えない。大事なことは、3割という量的関係を掴み出して、いかにうまく演算に利用できるかということである。実は、文系・社会系四大生の中には、こうした問題が解けない学生たちが、想像を絶するほどいるのである。

「大人社会は、原理ではなくスキルが求められる世界である」ということを、勝手に先取りしたり、洗脳されたりして、多くの学生たちは、スキルとその運用マニュアルを学習することには、当初は比較的熱意を持っている。しかし、原理から切り離されたものは、演繹の対象にはなりえず、個別に記憶することを余儀なくされるから、運用の仕方が多岐にわたると、たちまち習得不能に陥ってしまう。

原理から因果や論理の連鎖を用いて演繹することをじっくり楽しめる子、知的に誠実な子、事態の分析ができる真の社会的人材になりうる子を育てようとするれば、性急な社会化の圧力を加えることは、まったくの逆効果である。アルバイトは、社会性を身につけるのに良いのかも

しれないが、それは誰の為に良いのかと問われねばならない。

3. 理想的な自我育成に関する交流分析的命題と現況との落差

知的に誠実な子どもの自我が育って、初めて、事態を全方位に把握する分析力が生まれ、その力によって公正な成人の自我が育っていくのであるから、そうした子どもの生育プロセスに携わっていかうするのが本来の親の自我²⁶⁾である。

自発的な好奇心に沿ってなされた、実験的行動や、作品製作の結果、納得したり、知的作物を収穫した喜びに満たされたり、さらに親や大人に評価されたりして、知的な報償を獲得するまでが「知の共同作業空間」のミッション単位である。RDI（対人関係発達指導法）などは、まさに母子による「知の共同作業空間」と言うべきミッションそのものである。反対に、報償系に響かないようなマニュアル化された「教育訓練」は、効果が上がらないばかりか、知的な不誠実さを植えつけてしまう。

しかし、残念ながら、これが現実の姿である。子供の自我成分が十分成熟していない子どもに向かって、社会とはこのようなものだというような、同一化されていない Gestalt が、親 / 大人の自我から、押し付けられている。しかも、そのようなことは、教育訓練や就職指導の名の下で、日常茶飯事に行なわれ、大人しく押し付けられる子どもを、大人になったなどと言って、成長の証のように、評価している有様である。

しかし、その異質なものの受容が起こった時、子どもの無邪気な自我機能はまた一步衰弱し、それを推進力とする「公正な成人の自我の成長」もそれだけスローダウンする。そして、納得を伴わない Gestalt が大人の自我として移植され続け、奇妙に社会化された、頭でっかちな歪な子どもが作られていく。容易に異質なものを受容してしまう子どもは、子どもの自我の機能である納得欲求が既にかなり衰弱している。日常的に加えられ続ける時間圧によって、納得する喜びを味わうことがないためである。

逆に、大人の自我であれ、成人の自我であれ、それを拒絶する子どもたちの中には、子どもの自我機能である自己防衛意識を極端に先鋭化させている者たちがいる。外界への適応能力に不安を抱えているためである。

一方、健康な子どもの自我は、異質なものを直ちに受容れたり、拒絶したりすることはしない。彼らは、異質なものを検証すべきものとして暫定的な受容れ方をする。しかし、受容を強要され検証の機会が与えられないような状況では、猛烈に反撥もする。それは知的な誠実さの現れである。

VI. 知的不誠実さの矯正法

1. DB 分析訓練

知的に誠実な子どもは、如何に育てることができるのかという問題は、非常に重要であって、その要点は上で述べたところの親子の「知の共同作業空間」の実践である。しかし、知的に不

誠実に育ってしまった子どもを、如何に再教育できるのかという問題も、前者に劣らず重要な問題である。

この後者の問題に答えるには、まだ多くの経験が必要であるが、基本は、常々公正な成人の自我に基づいた教育実践を行うことと、学生の分析行為を個別に吟味する中で、不誠実な部分を自覚させ、必ずデータによって裏付けることを励行させ、分析に成功させることである。

そのために、筆者は次の2つの方法を訓練している。

1 推論に基づく分析

これは、次の手続きの繰り返しで実行される。

事態の基本的特性を抽出する

基本特性から想像される別の側面へ想像の幅を広げる

それをデータによって裏づける

裏づけのない推論は憶測として捨てる

裏付けられた事実を、事態の特性として組み込む

しかし、一方で推論や想像力を補う方法も必要である。そのような時は、次の方法を利用する。小さなデータベースであれば、これだけでも十分現実的な方法である。

2 全方位的・機械的分析

これは次の手続きで実行される。

重複レコードのない「事態の基本一覧」を作成する

基本一覧のすべての主要項目について、あらゆる組み合わせで、主項目と（一般には複数の）副次項目を選択し、すべての組み合わせにおいて、重複レコードのない表を作成する

これらの各表において、副次項目から1つの集計項目を選び、すべての選択においてそれぞれ集計表を作成する

1の方法では、とで分析スキルが必要となり、～のすべての過程で知的な誠実さが要求される。また、2の方法では、～のすべての過程で分析スキルが、の過程で集中的に誠実さが要求される。

2. 卒論指導

単独の科目において明らかに問題となるのは、個々の学生の分析の吟味に限られた時間しか割り当てられないということ以上に、一部の学生にしか、こうした訓練を施すことができないということである。したがって、学生が必ず履修する科目において、分析力の涵養をその大きな目的にする必要がある。分析力がなければ十分な卒論も書けないわけであるから、たとえば基礎演習として何らかの分析訓練を位置づけることが考えられる。

卒論では、可能な限りみずから観測し、データを収集し、全方位的な分析を行い、新しい側

面を現象化するような誠実さを強く要求すべきである。卒論指導ならば、すべての学生に対して、データに裏付けられた事実による立論を、比較的長期にわたって励行させ、事態の現象化に成功させることで、知的誠実さの改善を図って行ける可能性がある。

しかし、多くの学生が、あちらこちらの Web ページから記事をかき集め、結論らしきものをでっち上げるといった遣り方で、卒論作成のお茶を濁しているとすれば、極めて遺憾なことである。このような著作権侵害行為が、放置されているとすれば、知的不誠実さを助長することになる。まさか、不誠実な大人社会への巣立ちには、これほど相応しいものはないといった理由で、許容されているわけでもあるまいが、余りにも普通になったこうした行為のために、われわれが知の不誠実さに鈍感になっているのであれば、この国の教育はすでに死んでいるのであって、知的貧困の世代間連鎖が絶望的に繋がっていく。

卒論指導は、教育の総仕上げあり、データに裏付けられた事実を以て立論することを励行する公正な成人（普遍道徳の実践者）へ向けて卒業させていくのでなければ、知の育成としての教育は失敗したということになるだろう。

VII おわりに

不誠実な大人の自我で占拠され、そのため天然自然の子どもの自我が抑圧され、公正な成人の自我が未成熟状態に留まっているような貧しい自我状態が、世代間を伝わっているのが現実である。子ども世代の知の貧困に手をこまぬいてきた、否、手を貸してきた「親」たちには、子どもたちのためという理由での、財政赤字の削減努力や、環境の改善努力など、まるでリアリティがないはずである。

詰まるところ、近代国家の富国強兵という大人の自我が、親子を引き裂き、子どもたちの知的本能を壊し、健全な成人・健全な文化の発達を妨げてきたのである。真の教育は、この国家的自我に隷従する「教育」から脱皮し、国家の公正な成人としての自我たらんと欲しなければならない。そうでなければ、この国の将来はなかるう。

また、親は、真の子育てであるところの、「知の共同作業空間」という親子ミッションの中で、公正な成人であることに努め、子どもを真に子どもらしく成熟させることに努め、公正な成人としての成熟を教育に委ねたいと心底思うようになって初めて、教育は、国家の公正な成人としての自我たりうるのである。

ところで、国家における子どもの自我成分とは何に喩えられるべきであろうか。それは、民族の健康な生理的意識、民族に息づいてきた本来的意識、自然で調和の取れた草の根の意識といったものだろうか。それは閉鎖的な民族意識とはまったく別のもので、他民族の草の根の意識や、自然すらも同一化せずにはおかぬ健康な意識でなければならない。なぜなら、そのような開放性こそ、国家の公正な成人の自我を育てるエンジンたりうるからである。

もしもこの喩えに多少の妥当性があるならば、国家の大人の自我たる政治的意識は、国家の子どもの自我たる民族の健全な草の根の意識を破壊してはならない。草の根の破壊は、国家の

公正な成人の自我の息の根を止め、教育等の文化的貧困を招来する。政治は、国民を指導するなどといった野心を持つてはならない。政治は、草の根を不健康にするものからそれを守り、その開放性を発揮せしめねばならない。そこに、公正な成人が活躍し、当為が導かれ、品位のある国家が実現する。換言すれば、政治は徳育²⁷⁾などを目論んではならない。政治が徳育を必要とする社会を作った張本人であったことを忘れてはならないであろう。

なお、この小論を執筆中の2008年2月23日付のasahi.comに、京都大学、信州大学、富山大学などで、自閉症などの発達障害を有する学生に対する支援が始まったとの記事²⁸⁾が掲載された。こうした支援の必要性は、「知性のために教育はいかにあるべきかII」(紀要47号、2007)で指摘したところであったが、こうした動きこそ教育本来の姿であるという認識が、広く浸透することを願わずにはいられない。

注・参考文献

- 1) 丸山博道、知性のために教育はいかにあるべきか、名古屋経営短期大学 紀要 47 号、pp27-40、2006。
 - I . はじめに - 基礎教育の根幹
 - II . 自己の存在確認 - 自己実現の前提条件
 - III . 述語スキーマ - 世界を現象化するための前提条件
 - IV . 知の戦略的スキーマ - 精神産生の戦略
 - V . 構想力と現象化能力 - 自己実現の必要条件
 - VI . 「精神疾患」・「学習障害」 - 疾患・障害の起源と消滅
 - VII . おわりに - 生産至上主義からの教育解放
- 2) 丸山博道、知性のために教育はいかにあるべきかII、名古屋経営短期大学 紀要 48 号、pp49-64、2007。
 - I . はじめに - RDI の示唆するもの
 - II . 基礎学力について - 計算原理から演算系を構築する力
 - III . 基礎学力の教育体制 - 個は己の生理学的条件の下に自己を構築する権利と義務を有する
 - IV . 基礎学力への取り組みと大学改革 - 社会的人材養成から個の自己実現支援へ
 - V . おわりに - 教育実践はRDIを見習うべし
- 3) Mary McClure Goulding & Robert L. Goulding, Changing Lives through Redecision Therapy, 1979。

深沢道子訳、自己実現への再決断-TA・Gestalt 療法入門、星和書店、1993。
- 4) 丸山博道、存在性の諸問題、名古屋経営短期大学 紀要 42 号、pp91-102、2001。
- 5) 丸山博道、啓蒙の再生と普遍道德の役割について、名古屋経営短期大学 紀要 44 号、pp61-82、2003。

- 6) 丸山博道, Ecosophy の第一原理と道徳性, 名古屋経営短期大学 紀要 45 号, pp59-81, 2004.
- 7) Deep Ecology の提唱者 Arne Naess の Ecosophy では, その第一原理に Self-realization! (大自己実現を!) が掲げられているが⁸⁾, 生態論的精神性は, 存在を全方位的に把握すること抜きには築き得ないということから, 筆者はこの「存在の全方位的把握」を Ecosophy の第一原理としてきた⁹⁾.

しかし, 今回この小論を執筆して, 改めて考えるとき, 大自己を実現しようとする知的誠実さ(知的情熱)なしに, 存在の全方位的把握は不可能である. その意味で, Naess が Self-realization! を第一原理に据えたことは驚くべき卓見であったと思うようになった.

「存在は, 全方位的に把握されねばならない」とするのは, それを普遍道徳と位置付ける<成人>の意識である. 成人は, この道徳に基づいて, 決意して大自己を実現しようとする. しかし「把握せねばならぬ」としても, 本当に可能なのは, 知的誠実さ(知的情熱)を有している場合に限られる. だから小論はそれを育てねばならぬと主張している. しかし Naess のような自然を友として成長した好奇心旺盛な純真な<子ども>には, 自己同一世界の拡大への情熱こそすべての原動力であることがすでに直感されていたのである.

しかし, Naess の<子ども>は, 母親の薄い愛情と無縁ではなかった⁹⁾. 哲学者 Naess が, 生態論的精神性を獲得していったのは, 少年期の自然経験と共に, 後のガンジー研究が大きな働きをしたものと想像されるが, 結局のところ, 人は誰であれ, <成人>の自我によって, 大幅に再調整されねばならない. 知的誠実さが不足していれば, それは補われねばならないし, 人への冷淡なまなざしは, 人を全方位的に把握する中で修正されねばならない. その意味で, 親は, 自らの<親/大人>の自我を, <成人>の視点から, 大いに反省をして, 子どもの自我の<子ども>成分を大いに成熟させることに意を注がねばならない.

- 8) Arne Naess, Ecology, community and lifestyle, Cambridge univ. press, 1989.
- 9) David Rothenberg, IS IT PAINFUL TO THINK?, University of Minnesota press, 1993.
- 10) 山口和範, 情報技術教育の中でのリアリティのあるデータを活用した統計教育, 大学教育と情報, Vol.16 No.2, 社団法人 私立大学情報教育協会, 2007.
- 11) この有効性については多くの識者が同意するところであろう. ただ, 学生に関心のある生データの取得に困難を感じている. しかし, そうした思いはやはり商業主義に汚染されていると見るべきである. 関心のあるものだけを見ようとする, あるいは見せようとするは間違っている. 外界の独立性という知的戦略のスキーマにも適っていない. また関心のあるものだけで自己中心主義的な世界像を構成することは, 生態論的精神性にも抵触する.
- 12) 成熟した<子ども>の自我は, 世界に全方位的な関心を示すものであるが, 不幸にしてその境遇に恵まれなかった者は, <成人>の自我作用から, 普遍道徳の実践者たらんことを決意して, 真実と向き合わねばならない. したがって, 学生の拒否反応に対しては, 教育は基本的に, 事実を提示し, 当為を引き出してみせるだけでよい. それを拒否することは

- 不道德であり、人としての尊厳を汚すものであることを毅然として示すべきである。
- 13) 生産のプロセスは、事態の現象化なしに先に進めないような性格を有している。誠実に現象化しては対策するという行為があって初めて、ものは生み出される。
 - 14) 商品を買って消費するだけの精神活動は、必要を自ら満たす精神活動に比べれば、幼児と大人ほどの差がある。
 - 15) 子育てをしないのは、親本来のあり方ではない。
 - 16) 知りたがり、作りたがり、参加したがる子どもの特性が発揮される世界＝知る・作る・参加するという行為の世界。
 - 17) それを労働者の権利として認めることは企業の当然の社会的責任である。少子化の流れは、その社会的認知を容易にするかもしれない。しかし結局のところ、「知の共同作業空間」の親子ミッションを実践する力量なしには、子育てはできない。
 - 18) 計算を行なうには次の3つの要素が不可欠である。実現すべき目標を定める。実現するためのプロセスを機能単位で構成する。各機能単位を実現するためにそれぞれのスキルを運用する。スキルが積み上がらないというのは、プロセスの構成に問題があるということであろう。
 - 19) これは問題解決力ではない。耐え忍ぶだけでは、問題は解決しないが、耐え忍ぶ力がなければ、問題解決力を発揮し得ない。
 - 20) 産生プロセスに対する当事者感覚は希薄だった。
 - 21) こうした効果的なプレゼンテーションは彼の得意とするものだった。
 - 22) 「学校に行かなければ、働かねばならない」。こうした意識は、すでに彼の＜親／大人＞の自我に根付いていた。
 - 23) 本来の＜親／大人＞には、「子どもが学校に行けなければ、親が教育せねばならない」という意識が生まれねばならない。
 - 24) 彼の＜親／大人＞の自我は、「学校にも行かず、働きもしない人間は間違っている」と見なすことになる。
 - 25) 長谷川俊雄、「自立」を迫る社会と若者の生きづらさ、現代のエスプリ・青年期自立支援の心理教育-483, 2007。
 - 26) 大人の価値観を意識的に抑え、「子どもの知りたがる・納得したがる気持ち」を引き出しながら、「事態をあらゆる方向から調べ・分析する」ように導いていこうとする本来の親の自我。
 - 27) 徳育関連の資料は、次の Web ページを参照されたい。
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku/1bunka/dai9/siryou2.pdf>
 - 28) 「学生支援へ大学動く 自閉症などの発達障害」, 2008/02/23 15:32, <http://www.asahi.com/>